

巻 頭 言

教職課程の風土を創る

武 田 信 子

教師が教室で教えることが、そのまま生徒たちの学びになっているかというとは実はそうでもない。

カウンセリングの大家であるロジャーズがうまくいったカウンセリングを調べたら、カウンセリングの成果は、面接で扱っていた中身が問題ではなくて、そこに流れていた雰囲気の影響が一番大きかったという研究があるが、授業で起きていることもまさにそうであると思われる。

授業研究をいくら重ねても、教師のもともと持つ歴史が醸し出す教室の風土が生徒たちをきらきらさせるものでなければ、生徒たちの前頭葉は働かない。諏訪東京理科大学の篠原菊紀氏が、保育園で子どもたちの脳の働きを調べるのに、機械で脳波の測定をするかわりに、先生たちに目視で「子どもの目がきらきらしているか」をチェックしてもらったという。先生たちが、子どもたちがきらきらしているか、1日に2回のチェックを始めたところ、日がたつにつれて実際に子どもたちの目がきらきらし始めたというのだ。先生が一人ひとりの子どもたちが生き生きしているか意識することが、子どもたちを生き生きさせる、というわけである。生き生きしている間、前頭葉は働いている。子どもたちは学ぶ態勢にあるわけである。

確かに、マズローの欲求段階説を考えてみれば、教室の中で、生理的欲求が満たされ、安全が満たされ、学級への所属感があり、価値ある存在と認められ、その上で自己の成長を望むようになるのだから、学級の風土が学びにどれほど重要であるかはわかるだろう。実際、アメリカの研究で、学校風土の改善が生徒たちに及ぼす影響の大きさを調べたものがあるが、私たちの生活空間のもつ雰囲気は、子どもたちの学びに直結している。

しかるに、いじめがあったり、先生を信頼できなかったりする学級では、目がきらきらするわけがないし、つまらないと感じている授業では前頭葉は働かない。

とすれば、今日、模擬授業で前に立った5人の

学生たちと、その授業を受けた学生たちはどうだったろう？30人の学生が狭い椅子に腰かけてひしめいていたが、温かい雰囲気の中で一所懸命に授業者が披露した模擬授業を受け、互いに批評し合い、励まし合った。確かに、そこで授業者が披露した授業は特にすばらしいものではなく、目新しいものでもなく、新しい学びを与えたわけではないかもしれないが、仲間が緊張しつつ見せた努力と工夫の姿を見て、そこにいた2年生、3年生たちは、一人ひとりが「自分の学ぶべきこと」を学んで帰ったと思う。「自分も授業者になりたい」終わった後に、そういう感想が聞かれた。

私立大学の教職課程は、旧国立大学の教員養成校のように時間や手間暇をかけて教員養成ができるわけではない。限られた時間の中で、専門の力を伸ばしつつ、教育に関心を持ち続けなくてはならない。そのためには、学生同士の相互刺激が大切だし、励まし合う関係がキーとなる。もちろん、一人でこつこつと教員採用試験に向けて勉強することはできるし、そのほうが能率はよく、すんなり教員になっていけるかもしれない。教員になることを第一目標とするなら、寸暇を惜しんで勉強したほうが早いかもしれない。しかし、教師や親になるものには、よい風土がよい学びを生み出すと身を持って体験してほしい。前頭葉の働きを機械で測定するよりも、目のきらきら率を大切にすることを心にかけてほしい。

私立大学教職課程に与えられた少ない時間の中で、カリキュラムを整え、授業内容を充実させていながら、一方で、学生たちが自ら組織化していくような風土をどう作っていくか、それが本学のような小規模私立大学教員養成には大切なことではないかと思っている。

そういう風土を体験した学生たちは、実際の教員になってから、きっと感覚的にキラキラした子どもたちを求めると思うからである。学びの風土を創っていくと思うからである。

(本学教授：教職課程委員長)